# 我が九条

京都市立九条中学校
発行日：令和３年４月３０日
発行者：校長　三科　俊一
学校だより　５月号

## 「ありがとう」と「おかげさま」

４月１５日（木）の認証式の折に「『ありがとう』と『おかげさま』」のお話を少ししました。何か覚えてくれていますでしょうか？　今日はもう一度このテーマを記事にしてみます。「ありがとう」，素敵な響きのある言葉ですよね。もし何かの行いをして，相手から「ありがとう」と言われたら，うれしく，すがすがしくなりますよね。そんな言葉の力をもったフレーズであり，あいさつですね。「有り難う」とは，有ることが難しいことですから，めったにないという意味から生まれた言葉です。反対語は何だったかな？　そう，「当たり前」でしたね。何につけても「当たり前」と思うと，カドが立つものです。何でも「当たり前」ではなく，「ありがたい」事なんだと感じ取れる謙虚さが，幸せの第一歩ではないかと思っています。互いが互いを「ありがたい」と思うこと，今，うまくいっているのは「自分の知らない所で誰かの「お陰様」が埋め合わせしてくれているからでは…，と思えるって素晴らしいことではないでしょうか。ぜひ，自分のなかに備わり，自然と湧きおこる「ありがとう」「おかげさま」という気持ちを大切にして，具体的な行動に表してみてください。

## いいことはおかげさま

相田みつをさんの詩に，「いいことはおかげさま，わるいことは身から出たさび」というのがあります。「周りの人に感謝して，できなかったのは自分の努力不足，人のせいにせず…，自分に責任の多くがあったんだと考えよう。そう思えないようなことも当然あるだろうけれど，そう考えると，不満も出ないし自分自身も成長できるだろうし，相手へも感謝ができるのではないでしょうか。まずはこう考えられるようになることを目指してみましょうよ…。」というメッセージが込められているように思います。私も，まだまだここまで謙虚にはなかなかなることはできませんが，少しでもそんな考えができるようになりたいと思っています。

また，池上　彰さんの言葉にこんなのもあります。「つねに『おかげさま』の気持ちを持って，陰口や悪口は慎み，相手の話をじっくり聞く姿勢を持つ。そうすることで，好感度や信頼はずいぶん高まるし，『伝える力』にも一層磨きがかかります。」，皆さんどうですか？

中学生のこの時期，皆さんは大人の数倍の早さで毎日様々なことを感じ，学び取っています。何かができるようになるには自分の努力しかありませんが，大人の助言や周りの友だちのよりよい刺激がなければ，乗り越えられにくい困難な壁もあると思います。友だちや教職員が，そして家庭や地域の方々が皆さんを励ましてくれるから，あきめずに努力し成長を実感できることもたくさんあると思います。皆さんはこれからも様々な体験・経験を糧に成

長していくと思います。そのときに，「どこかで誰かに支えられているという『お陰様の心』」を持っていると，さらなる飛躍があるのではないかと思います。期待していますよ。がんばれ，九条中生。

## GWが始まります。こんなときこそ読書はいかがですか。

ゴールデンウィークの連休が始まります。今年も残念ながらいつもとは違う景色のGWとなってしまいました。京都は緊急事態措置のなか。春季総合体育大会・部活動は中止，連休明けの本校修学旅行も延期せざるを得なくなり，皆さんの活躍や楽しみの場が遠のいてしまいました。大変残念でなりません。ただ，そんな中でも皆さんの元気で明るい姿は教職員の励みとなっています。本当にありがとう。

こんなときだからこそ，連休中の時間のある時に読書はいかがでしょうか？　図書館司書の高橋先生が職員室前廊下においていただいている本の中から，１冊「あと少し，もう少し」をピックアップしてみました。数年前に作者の方が別の作品で「本屋大賞」を受賞され，ふらっと立ち寄る書店でよく目にしたお名前だったので手に取ってみました。中学校の先生をしておられただけに，この本の中にある「中学校っていくら失敗してもいい場所なんだって。人間関係でも勉強でもなんだって好きなだけ失敗したらいいって。こんなにやり直しがききやすい場所は滅多にないから。」の言葉には，私たち教職員の胸に響く重みがありました。こんなときだからこそ，読書はいかがですか。

「僕は読書が大好きだ。もっと多くの人に本を読むようアドバイスしたい。本の中には，まったく新しい世界が広がっているんだよ。旅行に行く余裕がなくても，本を読めば心の中で旅することができる。本の世界では，何でも見たいものをみて，どこでも行きたいところに行ける。」（マイケル・ジャクソン）

**「あと少し，もう少し」** 瀬尾まいこ　著

全校生徒は約150人。山深い場所にある市野中学の陸上部部長・桝井は，中学3年生になったばかり。学校を挙げての一大行事である中学校駅伝では，これまでギリギリのところでなんとか県大会に進出してきた男子駅伝チームだったが，今年最後の大会でなんとか上位入賞を目指したい。鬼のようで神のような体育教師である満田先生の指導についていけば間違いない！・・・はずだった。転勤で市野中学校を去ってしまった満田先生に代わって陸上部の顧問になったのは，元・美術部顧問の上原先生。新しく顧問となった上原先生は，スポーツが不得意。陸上に関してはまったくの素人で……。

中学最後の駅伝大会で県大会出場を目指す陸上部部長の桝井は，メンバー集めに奔走する。元いじめられっ子の設楽，不良の大田，頼みを断れないジロー，プライドの高い渡部，後輩の俊介。そして，バラバラの個性をひとつのゴールへ導こうとする桝井。寄せ集めの6人は県大会出場を目指して，襷をつなぐ。あと少し，もう少し，みんなと走りたい。それぞれが，まわりには分からない自分だけの悩みを抱えている。自分を変えたくて走っている者。なにかを振り切ろうと走る者。駅伝部のみんなと過ごす時間が「自分」をあぶり出し，自分の悩みと向き合うことになるのだが，ただがむしゃらに走るうちに，いつしか「自分」が悩みを追い越していく。